

宗教間寛容態度および終末観についての地域間 および宗教間における比較検討

International and Inter-religious Comparison of the Tolerance towards
the Effects of Inter-religion and the Eschatological Attitude

中 島 義 実 中 村 俊 哉

Yoshimi NAKASHIMA Shunya NAKAMURA

学校教育講座

(平成17年 9月30日受理)

問題と目的

中村・中島・倉元・中村・アンタルティカ(2005)による死生観と死別体験の国際比較研究を承けて、質問項目中の「シンクレティズム態度尺度」および「終末論尺度」について、地域間及び宗教間の視点から比較検討を行う。

一連の研究は、比較文化的研究であるが、相互比較するおのおのの地域の文化内にも多層性をみとめる視点から行われている。すでに中村(2004, 2005)のインタビュー法による研究が、この視点からのデータの収集と分析としてなされている。文化的事象は同一地域内でも切り口によって様々な分かれ方をみせる。今回は、「個人的に信じている」と回答された宗教を切り口として、地域内での分かれ方を見、この切り口を地域間で相互比較することを試みる。

また同時に我々の研究は、死生観を捉えるときに重要な要因のひとつとなる宗教についても、多層性をみとめる視点から行われている。ある既成の宗教が伝播するというひとつをとってみても、教義の全てが伝播した地域に根を下ろすとは限らない。むしろそれまでその地域にあった様々な信仰や風土などからの再解釈、取捨選択(意識的であれ結果的であれ)などがなされ、何らかに混交した形で取り入れられていることも多い。それゆえ、同一の宗教を信仰していると称しても、地域によって信念の内容や強く意識される力点などは様々となる。この様子を捉えてみることをも試みたい。

以上の目的から、まず「シンクレティズム態度尺度」についての検討を行う。この尺度は、シンクレティズムの諸現象の中では日常的・世俗的・

意識的なものを問う項目群からなり、一部「エキユメニズム」とする方が近いような事項も含むが、上述の、同一宗教に対する地域による信念の内容や強度の異なりに関する、基礎的なデータの一部を提供するものと考えられる。

他方の「終末論尺度」は、終末観に関するものであり、我々の研究全体の中では「死後観」や「死体の処理」などとの関わりで採用された尺度でもある。他方で上述の視点からみると「終末観」は、個々の宗教の信念体系の中でも教義性の高いものであろうと仮定できる。世の中全体が単一の時間的方向軸に向かって流れており、それをコントロールする絶対者がいて、ゴールの時点で決定的な裁定および救済がなされる、というイメージは、「原始宗教」などにおいてははっきり明瞭ではなく、そのような観念を有しない信仰も数多い。国家の成立にともなう宗教体系の展開、そして「世界宗教」などによって明瞭に教義化され洗練されるものとされる。したがって、個々の宗教の伝播の結果としての現時点における、信念の強弱について、教義との距離の大小で捉えやすいものであるとみられる。

もっとも他方で、地球環境問題など科学文明の行き詰まり感等から「人類の危機」としての「終末感」が現代において増している可能性もあり、この場合、教義との距離関係が必ずしも近くはないところでの、終末観の強さとしてみられる可能性もあるので考慮が必要である。ただこれと一神教の世俗化からくる歴史観の一展開の側面をもつものでもある。

以上のような目的から、上述の2尺度についての地域間および宗教間での比較を試みることをす

る。

方法

中村ら(2005)の質問紙データのうち、福岡、沖縄、ベンガル、バリの4地域それぞれにおいて、「個人的に信じている宗教」の回答カテゴリー人数が総被験者の5%以上を占めたカテゴリーに属する被験者を対象とした。すなわち、福岡では仏教(25.2%)・なし(58.4)、沖縄では仏教(5.7%)・キリスト教(7.7%)・その他(5.3%)・なし(69.9%)、ベンガルでは仏教(7.1%)・ヒンドゥー教(75.0%)・なし

(9.0%)、バリではキリスト教(8.8%)・イスラム教(11.3%)・ヒンドゥー教(75.0%)、と回答した被験者のデータを対象とした。また、十分な被験者数は得られていないが、ジャカルタにおいて同じ質問紙を用いて得られたデータを、同様の手続きによって参考として分析した。

それぞれの地域ごとに、「シンクレティズム態度尺度」(表1)および「終末論尺度」(表2)の尺度値と項目値について、宗教による比較を行った。また、各尺度値については性差も検討した。

表1 「シンクレティズム態度尺度」(SCTS)

SCTS1	元々、神は共通であり、所属する宗派以外の神社、寺、教会に行って祈ってもかまわない
SCTS2	人々が自分の宗教以外の宗派の寺、教会に行って祈ることで、宗教対立は減るだろう
SCTS3	異なった宗教同士で取り入れたり融合したりすることは、かまわない
SCTS4	中央の宗教の教義に合わせるのではなく、伝統文化のやり方を残すことに賛成する
SCTS5	結婚式をキリスト教式に挙げた人が、子どものために七五三で神社に行くのは自然だ

表2 「終末論尺度」(ES)

ES1	この世界は近いうちに終わりの日を迎える
ES2	地震や災害などが多く起こると、この世の終末の前兆だ
ES3	この世の中の終わりがきても、信仰によって救われて、永遠の命を与えられる人々がいる
ES4	この世の中の終わりを決定する、絶対者が存在する
ES5	この世の中の終わりが、近いうちにやってくる
ES6	いくつかの予言において、この世の終わりが来るとされているのを信じる
ES7	この世の終わりが近い、という予言を聞くと怖い
ES8	終末の日は、この世の矛盾が解決される救済の日である
ES9	終末の日には、救済者が来臨する

結果

「シンクレティズム態度尺度」の尺度値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表1および図1に示した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。参考のために、地域内の被験者全体の尺度値を中村ら(2005)から表1および図1に転載した。なお、宗教と性別の二要因の分散分析を行ったところ、福岡においてのみ、性別の主効果(男性(15.9)<

女性(17.5)。F(1,175)=13.3**)と交互作用(F(1,175)=8.1**)。仏教において、男性(12.1)<女性(16.7))がみられた(なお、福岡の被験者の年齢構成をベンガルやバリと近似させるために20代以下にしぼって同様の分析を行っても、交互作用こそみられなかったが、宗教の主効果(仏教(14.8)<なし(17.8) F(1,69)=10.9**)と性別の主効果(男性(16.3)<女性(17.6) F(1,69)=4.5**)がみられた)。

表3 「シンクレティズム態度尺度」(SCTS)の尺度値の比較

	仏教	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	その他	なし	全(注)
福岡	15.2					17.7	16.9
沖縄	15.8	15.2			17.4	16.7	16.6
ベンガル	18.6			18.1		19.4	18.2
バリ		14.4	11.7	16.5			15.7
ジャカルタ		15.9	8.6				

福岡：仏教<なし (F(1,175)=21.3**)

バリ：イスラム<ヒンドゥー (F(2,140)=7.7**)

ジャカルタ：キリスト>イスラム (F(1,39)=30.7**)

(注)地域内の被験者全体

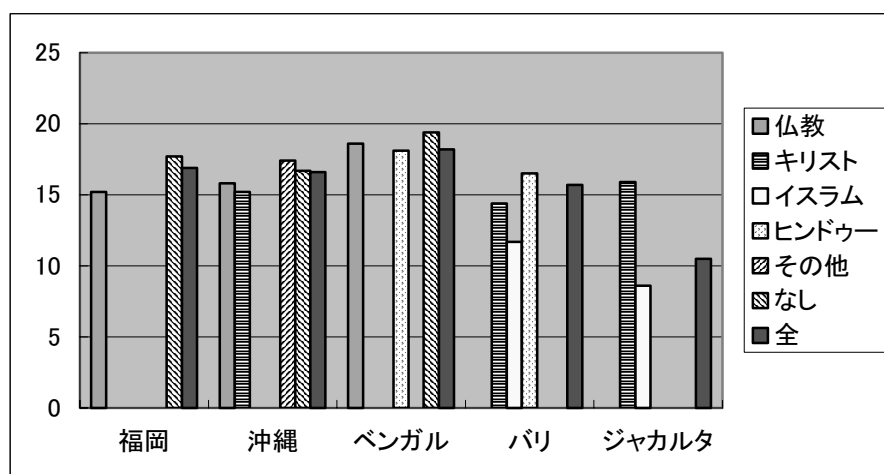


図1 「シンクレティズム態度尺度」の尺度値の比較

「シンクレティズム態度尺度」の各項目値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表2に示

した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。

表4 「シンクレティズム態度尺度」(SCTS)の項目値の比較

	福岡		沖縄				ベンガル			バリ		ジャカルタ		
	仏教	なし	仏教	キリスト	その他	なし	仏教	ヒンドゥー	なし	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	キリスト	イスラム
SCTS1	2.9	3.6	3.1	2.7	3.8	3.2	3.6	4.0	4.5	3.2	1.9	3.4	4.3	1.8
SCTS2	2.5	3.0	2.9	2.9	2.7	2.8	4.1	3.9	4.2	2.8	2.3	3.2	3.2	1.5
SCTS3	3.2	3.8	3.2	3.3	3.5	3.5	3.8	3.7	4.4	2.5	1.5	2.8	2.9	1.2
SCTS4	3.4	3.7	3.7	3.4	3.8	3.6	4.5	3.3	3.4	3.9	3.9	4.5	3.1	2.6
SCTS5	3.2	3.6	3.0	2.9	3.6	3.6	2.6	3.2	2.9	2.0	1.8	2.5	2.4	1.6

福岡：SCTS1, SCTS2, SCTS3, SCTS5 仏教<なし (F(1,176)=12.3**,5.5**,11.6**,5.5**)

沖縄：SCTS5 キリスト<なし (F(3,187)=3.1**)

ベンガル：SCTS4 仏教>ヒンドゥー,なし (F(2,131)=6.4**)

バリ：SCTS1, SCTS2, SCTS3 イスラム<ヒンドゥー (F(2,141)=7.1**,3.1**,6.7**)

SCTS4 キリスト>イスラム<ヒンドゥー (F(2,140)=2.7**)

ジャカルタ：SCTS1, SCTS2, SCTS3, SCTS5 キリスト>イスラム (F(1,41)=23.8**,19.5**,31.6**,3.4**)

「終末論尺度」の尺度値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表3および図2に示した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。参考のために、地域内の被験者全体の尺度値を中村ら(2005)から表3お

よび図2に転載した。なお、宗教と性別の二要因の分散分析を行ったところ、福岡においてのみ、性別の主効果（男性(15.1) < 女性(18.2) $F(1,172)=12.7^{**}$ ）がみられた。

表5 「終末論尺度」(E S) の尺度値の比較

	仏教	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	その他	なし	全(注)
福岡	17.1					16.4	17.7
沖縄	20.3	22.5			18.9	17.2	18.5
ベンガル	26.8			24.5		17.7	24.5
バリ		34.8	28.3	28.7			29.1
ジャカルタ		35.4	31.8				32.7

沖縄：キリスト>なし ($F(3,182)=2.9^{**}$)

ベンガル：仏教・ヒンドゥー>なし ($F(2,127)=6.9^{**}$)

バリ：キリスト>イスラム・ヒンドゥー ($F(2,138)=3.4^{**}$)

ジャカルタ：キリスト>イスラム ($F(1,41)=4.1^{**}$)

(注)地域内の被験者全体

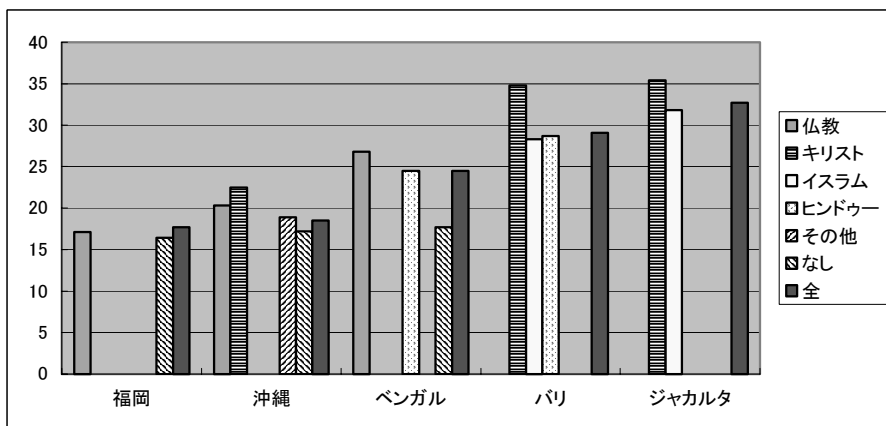


図2 「終末論尺度」の尺度値の比較

「終末論尺度」の項目値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表4に示した。各地域内の

比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。

表6 「終末論尺度」(ES)の項目値の比較

	福岡		沖縄			ベンガル			バリ		ジャカルタ			
	仏教	なし	仏教	キリスト	その他	なし	仏教	ヒンドゥー	なし	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	キリスト	イスラム
ES1	2.2	2.4	2.5	2.2	2.2	2.3	2.6	2.4	2.2	4.1	4.3	3.1	4.5	4.8
ES2	2.3	2.3	2.4	2.2	2.2	2.2	2.8	2.8	2.5	3.9	3.0	2.9	3.9	3.8
ES3	2.1	1.3	2.1	3.0	1.9	1.5	3.4	2.7	2.1	3.9	2.0	3.5	4.5	2.3
ES4	1.6	1.4	1.8	2.5	1.5	1.4	3.6	3.3	2.7	4.4	4.3	4.1	4.1	4.7
ES5	1.9	2.1	2.4	2.2	2.0	1.9	3.1	2.7	1.9	3.5	4.0	2.9	4.6	4.3
ES6	1.9	1.7	2.4	2.2	1.8	1.7	2.6	2.5	1.6	2.6	2.3	2.8	2.5	2.8
ES7	2.7	2.5	2.9	3.0	3.6	2.7	2.2	2.4	1.6	3.0	2.6	2.8	2.6	3.3
ES8	1.7	1.5	1.9	2.4	2.0	1.7	3.2	3.0	2.2	3.4	2.5	3.1	4.4	2.8
ES9	1.7	1.5	1.7	2.7	1.5	1.6	3.5	2.9	2.1	4.6	3.0	3.7	4.3	3.2

福岡: ES3, ES4 仏教>なし (F(1,174)=37.2**,4.1**)

沖縄: ES3, ES9 キリスト>その他・なし (F(3,180)=9.6**, F(3,178)=4.7**)

ES4 キリスト>なし (F(3,181)=4.9**)

ベンガル: ES3 仏教>なし (F(2,132)=4.0**)

ES5, ES6, ES9 仏教・ヒンドゥー>なし (F(2,133)=4.1**, F(2,131)=6.0**, F(2,131)=5.6**)

ES7, ES8 ヒンドゥー>なし (F(2,132)=3.4**, F(2,130)=3.9**)

バリ: ES1 キリスト・イスラム>ヒンドゥー (F(2,141)=10.6**)

ES2 キリスト>ヒンドゥー (F(2,141)=4.1**)

ES3 キリスト・ヒンドゥー>イスラム (F(2,141)=12.1**)

ES5 イスラム>ヒンドゥー (F(2,139)=7.8**)

ES9 キリスト>イスラム・ヒンドゥー (F(2,140)=7.3**)

ジャカルタ: ES3, ES8, ES9 キリスト>イスラム (F(1,41)=16.9**,14.0**,4.5**)

考察

1. シンクレティズム尺度

まず、中村ら(2005)で検討した、尺度値の地域間比較を確認しておく。福岡、沖縄、ベンガルで高く、バリが低いという結果であった。

このうち、福岡とバリで、地域内の宗教間比較で有意差がみられた。

福岡は地域間比較では宗教間混交現象に寛容とみられていたが、宗教ごとにみると、信じる宗教なしの場合は確かに尺度値が高いが、仏教を信じているとする者はそれほど寛容ではない。日本人は宗教間の混交に寛容であるとする一般イメージがあるが、個人の信仰によって一概にそうとは言えない可能性が示された。また、日本における仏教信仰の存在感や影響性についても、あまり大きくはないという一般イメージがあるかもしれないが、宗教なし群との間に差がみられ、仏教群の方が寛容度が低かったことから、仏教信仰を表明する者にとっての仏教は、それ以外の者にとってよりも、明瞭な存在感があることが示唆された。信仰する群で寛容度が下がるので、日本の仏教が他

宗教に寛容であるとも言いきれないことになる。信仰を表明するということは何らかにコミットすることなのであるから自然なことでもある。特に、他地域ではみられなかった交互作用(性別の主効果については後に終末観と併せて考察する)から、男性においてこれらのことが強く言えることになる。日本の多神教的風土において、言語的意識で理性的コミットとして信心を言明することが少ないとすると、だからこそ逆に、日本においてあえてある宗教を「信じる」と回答した者は、言語理性的にコミットする傾向が多少なりとも際立つ者であり、宗教間を分節化して捉える傾向が相対的には強くなっているのかもしれない。

バリについては、他地域より寛容度が低かったことについて、イスラム教の影響が考えられていた。今回の結果でも、イスラム教が、特にヒンドゥー教に対して有意に低いという結果となった。ただしヒンドゥー教群自体も、ベンガルより寛容度は低くなっている。なお、イスラム教における寛容度の低さは、ジャカルタではさらに際立っている可能性がある。

他方でベンガルは、どの宗教群もおしなべて寛容度が高かった。一神教徒がそもそも少ないのがこの地域の特徴でもあった（しかし同様に一神教徒の少ない福岡において宗教による寛容度が異なっていたのは先にみたとおりである）。

沖縄では明瞭な特徴はみられなかった。

項目値の比較からは以下のことが考察される。

福岡では項目SCTS 4 以外が一貫して仏教群が低い傾向にあり、尺度値と同じ傾向を示した。

沖縄ではキリスト教群が項目SCTS5で「宗教なし」群より有意に低かった。一神教ではあるが「七五三で神社に行く」などのこと以外についてはさほど非寛容ではない。さほど非寛容ではない点と、しかし儀礼では区別する意識がある点が興味深く、欧米などのキリスト教徒と比べてどうであるのか、検討が待たれる。ちなみに後述するバリのキリスト教徒との比較も考えられるが、中村ら(2005)で確認したように、この項目SCTS 5 についてはインドネシア語版では、「七五三」の部分で「その子供が違う宗教でお祝いされる」となっているため、宗教を区分する意識が他の地域よりも刺激された結果の反応となっている可能性があり、実際どの宗教を信じる者でも、この項目が最も低い傾向は一致している。この関係で、単純比較はできない。

ベンガルでは項目SCTS4にのみ特徴がみられた。この項目については後述する。

バリでは項目SCTS5以外では、イスラム教群がヒンドゥー教群より低い結果となり、尺度値と同じ傾向であった。また項目SCTS 4 についてはキリスト教群もヒンドゥー教群より低い結果となった。参考までにジャカルタでは、SCTS 4 以外で、イスラム教群がキリスト教群より低い可能性がある。SCTS 4 も、バリに比べて、イスラム教が低い傾向にあるかもしれない。

さてこの項目SCTS 4 「中央の宗教の教義に合わせるのではなく伝統文化のやり方を残すことに賛成する」は独特の反応をみた項目である。福岡では他の項目で「なし」群より寛容度の低かった仏教群が、この項目では差がみられなかった。他方ベンガルでは、他の項目では宗教間差がみられなかったのに、この項目に関してのみ、仏教群が他より高い結果となった。仏教という宗教の、在地伝統文化への寛容さや包摂可能性を示すと考えてよいであろうか。他方でバリの結果をどう考えるか。地域内で、キリスト教群とイスラム教群がヒンドゥー教群より低かったのは、一神教のもつ教義や象徴の集権性・統制性と考えてもよいかもしれ

れない。ただし、地域間でみると、バリは他地域より全体としてこの項目値が高く、キリスト教群やイスラム教群も、ベンガルの仏教群以外の値と同等ないしは上回っている。中村(2005)によればシンクレティズムをかなり強く否定するイスラム化が進行しつつあるインドネシアであるが、バリにおいては地域の伝統を残す意識が強そうである。参考として検討しているジャカルタのデータではこの値が低い（他のどの地域よりも低い可能性さえある）ことから、バリの地域性、ひいてはインドネシアにおける中央と地方との関係も影響している可能性が考えられる。この点については、中村のインタビュー調査でも、バリのキリスト教徒やイスラム教徒からはまだデータが得られていないことから、日常儀礼や行事なども含めた今後の調査が待たれるところである。

2. 終末論尺度

こちらまず尺度値に付いて検討する。

先に行った地域間比較では、ベンガルとバリが高く、福岡と沖縄が低い結果が得られていた。

このうちベンガルの宗教間比較では、信仰をもつかどうかで高低を分け、「宗教なし」群では、日本の2地域と同程度の値となった。

バリは全体として高いのであるが、キリスト教群の高さが際立っていた。同じく終末論的教義をもつ一神教であるイスラム教群が、キリスト教群ほどには高くなかったのが興味深い。この傾向はジャカルタでも一致していると思われる。これらについては項目値で検討する。

沖縄ではキリスト教が「なし」に対して高く、自然な傾向であるが、仏教がキリスト教に対して明確に差があると言えなかった点も注目される。

福岡では宗教間の差はみられず、性差がみられた。先にみた「シンクレティズム態度尺度」においても福岡でのみ性差がみられた。これはいかなることであろうか。男女における信念の傾向の相違がみられたのが福岡だけであったことをどう考えればよいであろうか。ここでまとめて考察しておきたい。世俗化が進行し、人々の意識的態度に対する宗教の影響性が後退したからであろうか。宗教の影響が後退したとき、終末観や他宗教への寛容度は、個々人の時代感覚や宗教的感性に左右される度合いが増し、そのひとつとして性別による相違が前面に出るのかもしれない。この場合、女性の方が終末意識を感じやすく、混交に対してはより寛容となることを示す結果となったと解することができる。もっとも、信仰する宗教をもた

なくなることで寛容さの増す程度は、男性の方が高い。この点については世俗化の影響は男性に強く出やすいのかもしれない。信仰をもつときの寛容さの低さや終末感の低さから、男性の方が言語的理性に依拠する態度をもち、世俗化の影響がここに出やすいということであるようにも考えられる。女性の宗教感覚は男性ほどには世俗化に影響されにくいのであろうか。いずれにせよ、このような差が前面化したのは福岡のみであった。

次に項目値について検討する。

福岡で、項目ES3、4について仏教群と「なし」群に差がみられた。ES3「終末に救われる人がある」ということ、ES4「終末を決定する絶対者がある」ということ、という救済感・救済感が高いというより「なし」群が低い。信仰をもっていないわけであるから自然でもある。その他の、終末の切迫感や確信感のようなものは「なし」群と差がなく、仏教群全体として終末感がさほど強くないと言える。

沖縄でも仏教には同様の傾向がある。キリスト教はさすがに、ES3「救われる者」、ES4「決定する絶対者」、およびES9「救済者の来臨」で特色を出しているかにみえるが、仔細にみれば、ES3「救われる者」とES4「絶対者の決定」については、「なし」群などが低いからの結果でもあり、福岡と似ている。ES9「来臨」については他に対して明らかに高いと言える。逆に言えばキリスト教の根本教義の色が強く出ているのはこの項目だけとも言える訳で、キリスト教としては沖縄でのそれはマイルドな方の終末感をもって信仰されているようにみえる。

ベンガルでは宗教による特色が出ている。ES5「終末が近く来る」、ES6「予言を信じる」、ES9「救済者の来臨」については「なし」群が低いため、信仰をもつ2群が高く出ている。仏教にのみ高く出たのが、ES3「救われる人がいる」、である。ヒンドゥーにのみ高く出たのは、ES7「終末が怖い」、と、ES8「終末は世の矛盾救済の日」、である。ヒンドゥーは仏教ほどには救済色が強くないわけである。先行して行った他の尺度の地域間比較でも、ベンガルでは人と神的存在との間の超絶感が強く、このことと、ベンガルのヒンドゥーのこのような終末感（世としては矛盾の救済であるが、個人的には怖くもある）とは関係があるかもしれない。

バリについてはまず、どの宗教でも終末感はおしなべて高いということを言わねばならない。同じヒンドゥーでもベンガルよりも高い値が並び、

同じキリスト教でみれば値は沖縄の比ではない。しかし、宗教間での高低強弱は、項目によって複雑に異なりをみせる。キリスト教は、ES1「終末を迎えるのは近い」、ES2「天災は前兆」、ES3「救われる者」、ES9「救済者の来臨」、において高い方に入り、他の項目でも、他の宗教より低いということがない。教義色が明快に出ているとも言える。ヒンドゥーは、ES1「終末を迎えるのは近い」、ES2「天災は前兆」、ES9「救済者の来臨」などで低く出ているが、全てで低いわけではなく、ES3「救われる人がいる」、では高い側に入る。この項目はベンガルのヒンドゥーでは高くなかっただけに、同じ宗教でも地域による異なりがあるところとして注目される。

そしてもっとも注目されるのは、イスラム教である。同じ一神教ということでキリスト教と似た結果となるかというそうではない。ES2「前兆」についてキリスト教のように高くはなく、ES9「救済者の来臨」についてはヒンドゥー教とともに低く、ES3「救われる人がいる」についてはヒンドゥーよりも低い結果となっている。

これらについて、まず、ES3「救われる人がいる」について低いのは、この項目が「信仰による救い」としているからかもしれない。イスラム教では信仰とともに行いが重視される。行いの重視が前面に出ないと彼らはその項目には賛成しないのかもしれない。ES9「来臨」については、イスラム教においては終末は「審判」の色彩がキリスト教よりもかなり強いということが言えるかもしれない。そして、キリスト教では信仰によって裁きを免れる「救済」であるのに対し、イスラム教では行いも含めて審判されて結果を申し渡されることになる。また、キリスト教では救済者の側からこの世に来臨するが、イスラム教では人が神の前にひとりずつ呼び出されるイメージが強いかもしれない。これらの項目はジャカルタでも同傾向となっていると思われ、イスラム教の特徴とみてよいであろう。この意味で今回の終末論尺度は、キリスト教的であったと言えるかもしれない。

ES2「前兆」意識が高くない割には、ES1やES5のように「終末が近い」意識がもっとも強いのもバリのイスラム教徒である。イスラム教では終末は突然おとずれるものと観念されているところはたしかにある。全く神の思召しひとつであるから、人が前兆を云々できることとして観念されにくい可能性もある。全体としてキリスト教以上に、神の超絶性、神の意思や選びや判断の絶対性が際立つ信仰として表れているとみられようか。もっ

ともジャカルタのイスラム教徒においては、ES2の前兆意識はかなり高くなっている。他の項目やシンクレティズム尺度からは、ジャカルタのイスラムの方とバリのイスラムとでは、もとの教義に対する純度はジャカルタの方が高いように思われる。そう考えると、むしろバリにおける神観念の超絶性は、ヒンドゥーからの影響とも思われる。

3. 総合考察

あらためて地域それぞれの特徴を考察する。

福岡では、他地域にみられなかった性差がみられ、世俗化との関係が考えられた。とはいえ仏教への信仰表明のもつ影響性も、強いとはいえないながらもみられた。

沖縄では宗教間の特徴があまり際立たず、キリスト教もマイルドなあり方で信仰されていた。これらの点は首都圏や関西、東北などではどのようになるであろうか、興味深い。

ベンガルでは宗教間の寛容さが高く、信仰をもつ者ともたない者の間、また宗教間で、教義に関連する相違が、日本よりは出ていた。

バリではさらに教義の特徴がよく出ているが、宗教間の寛容さはベンガルほどには高くない（項目SCTS5における翻訳の問題もあるが、それを差し引いても異教異宗派を区別する傾向はみられた）。これは、ベンガルにはなかった一神教徒の影響ともみられるが、非一神教徒でも似た傾向はあった。中村(2005)で考察されたように、バリにおいては「サンヒャンウディ」という一つの神イメージの共有など、一神教親和的なところがあるのかもしれない。ちなみにジャカルタではキリスト教徒とイスラム教徒との間で寛容度の異なりが大きい可能性があり、バリのような共有する神イメージが希薄であろうこととの関係も想定される。他方、バリではまた、地域文化重視色も強い。この点ジャカルタでは地域文化重視色はかなり弱い可能性があり、寛容度の問題は伝統遵守との関係もあるかもしれない。インドネシアにおけるバリという地方の位置づけや、インドネシア自体における中央と地方との関係性などと併せて考察を重ねる必要がある。

同じ宗教名でも地域による信仰のあり方が違ってく様子も見出された。

仏教は福岡では、寛容度を低める作用をもってしたが、ベンガルではそのようなことはみられなかった。むしろ高い項目もあった。終末感はベンガルの方が高かった。福岡の仏教の終末観が一般的な救済理論に近いそれであるのに対し、ベンガ

ルのそれは切迫した現実感をもつものであった。

ヒンドゥーは、寛容さにおいてはベンガルでもバリでも似た様相であった。終末感はバリの方が高かった。ところがバリではより高い終末感をもつ一神教の存在があるので、ヒンドゥーの終末感はバリの中では低い方になる。逆にベンガルの中ではヒンドゥー教徒は終末感の高い方となる。また、バリのヒンドゥー信仰はベンガルのそれよりも救済色を有しているようにもみえる。共通しているのは終末への恐怖感かもしれない。

イスラムについては、バリの方が、ジャカルタよりも、ヒンドゥーや地域文化のような、先行する宗教文化事象の影響を受けている可能性が唆された。

以上のように、地域によって宗教間の差異のみられる程度が異なっており、みられるあり方も異なっている。また、同一の宗教でも信心において強く意識される点に異なりがある。今回、宗教間混交や終末観という、意識的・言語的教義性の際立ちやすいことからについてみた結果でさえこのようであった。まして、より日常的慣習のようなことになっていくほど、同一の宗教の地域による異なりが幅をもってみられてくるであろう。そのような意味で、一連の研究で得られてきたデータについて、今回指摘された点も補足しつつ、なお詳細な分析が必要である。そこからまた、再度現地で聞き取っていかねばならない課題も見えてくることと思われる。

文献

- 橋爪大三郎 2001 世界がわかる宗教社会学入門 筑摩書房
- 中村俊哉 2004 南アジアの死生観 インタビュー法から 福岡教育大学紀要、第53号、第4分冊、247-263
- 中村俊哉 2005 インドネシアの死生観：バリ、ジャカルタ、ジョグジャカルタにおけるインタビューから 福岡教育大学紀要、第54号、第4分冊、199-221
- 中村俊哉・中島義実・倉元直樹・中村幸・イカデ アンテルティカ 2005 死生観と死別体験の国際比較：福岡、沖縄、ベンガル、バリの比較から見えるもの 福岡教育大学紀要、第54号、第4分冊、223-240
- 小口偉一・堀一郎(監修) 1973 宗教学辞典 東京大学出版会

宗教間寛容態度および終末観についての地域間および宗教間における比較検討